

# 令和 2 年度 研究紀要

研究主題

探究活動を通して

主体的に学び続けるための資質・能力を高める指導の工夫

－読書科と総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメント－



## = 目次 =

I	はじめに	・ ・ ・ ・ ・ 1
II	研究内容	・ ・ ・ ・ ・ 1
	1 主題設定の理由	・ ・ ・ ・ ・ 1
	2 研究の構想	・ ・ ・ ・ ・ 2
	ESDカレンダー	・ ・ ・ ・ ・ 9
III	各学年の実践事例	・ ・ ・ ・ 12
	1学年 「バトらないビブリオ」の取組	・ ・ ・ ・ 12
	2学年 「新聞深掘レポートづくり&プレゼンテーション」の取組	・ ・ ・ ・ 16
	3学年 「卒業研究」の取組	・ ・ ・ ・ 19
IV	研究の成果と課題	・ ・ ・ ・ 23
	終わりに	・ ・ ・ ・ 27

【研究主題】

探究活動を通して主体的に学び続けるための資質・能力を高める指導の工夫  
— 読書科と総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメント —

I はじめに

中学校の新学習指導要領への移行期間の3年間で今年度で終わります。新たに前文に掲げられたように、目の前の生徒達に、持続可能な社会の創り手となるための資質・能力を身に付けさせることは、学校の使命だと言えます。令和3年度の新学習指導要領の全面実施に向け、3年計画で準備をしてきました。その3年目に当たるのが、本研究です。

しかしながら、突然のコロナ禍により、必ずしも計画通りに進んだわけではありません。言わば、カリキュラム・マネジメントの連続でした。そのため、大変不十分な実践報告になってしまったことは否めません。しかしながら、限られた条件の中で、工夫して取り組んだものでもあります。他校の実践のお役に立つことがあれば、この上ない幸せであります。

II 研究内容

1 主題設定の理由

「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。また、急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあっては、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。」（「学習指導要領解説 総則編 第一章 総説 1(1)」）

上記を背景として、学習指導要領の改訂がなされ、初めて前文が掲げられた。前文には、「これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」（「学習指導要領前文」）と、子供達が「持続可能な社会の創り手」となるように教育することが、学校の役割だと示された。そして、その育成のために、「社会に開かれた教育課程」の実現によって、「資質・能力の3つの柱」

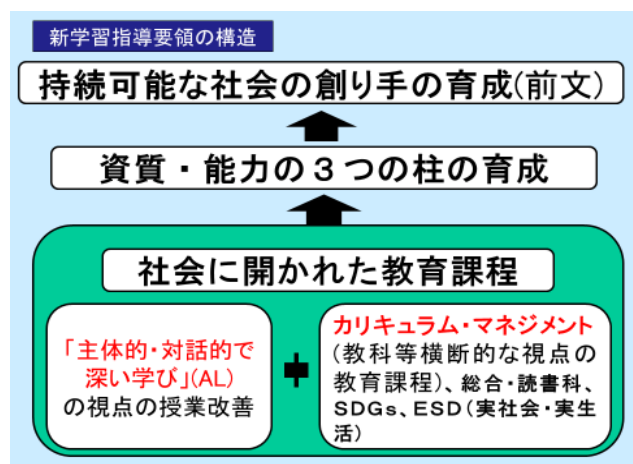


図1 新学習指導要領の構成

(①生きて働く知識及び技能の習得、②未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力等の育成、③学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性等の涵養)の育成を図ることが示されている。

本校では、図1のように、社会に開かれた教育課程の構成要素を、大きく2つと捉えた。一つは、「主

体的・対話的で深い学び」の視点の授業改善、もう一つは、カリキュラム・マネジメントである。

カリキュラム・マネジメントについては、資質・能力の3つの柱を念頭に置き、教科等横断的な視点をもって教育課程を編成することにした。なぜなら、以前から本校では、生徒達のために多種多様な取組が実践されており、さらにそれぞれの「つながり」や「まとまり」を工夫すれば、これからの社会で必要とされる資質・能力の育成に大きな力になると考えたからである。

そこで、3年目にあたる今年度については、授業改善や各教科領域内での質の向上を継続しながらも、今求められている「学び」に重要な教科等横断的な視点の教育課程の充実を目指し、探究活動を充実させることで、主体的に学び続ける生徒の育成することを研究主題とした。その際、教科等横断的な視点の核となる領域は、総合的な学習の時間と江戸川区独自の読書科であるため、2つの領域を関連させるとともに、そのうえで他の教科領域との関連を目指すこととした。なお、移行期間の取組の経緯は次のようになる。

表1 新学習指導要領移行期間の取組

未来を創る生徒を育てる		平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
		案を考える(準備)	やってみる(試行)	磨く(充実)	更に磨く・開発する
社会に開かれた教育課程	<b>カリキュラム・マネジメント</b> ① ESDカレンダーを創る ② 教科等横断的な「つながり」をつくる	① 今までの実践を発展させる ② 足りない分を加える ③ 道徳・特活(行事)・総合の計画 ④ 教科の計画と関連付ける ⑤ 修正する ⑥ いい案は取り入れる	① アイデアを実践 ② 試行する	① よい実践を取り入れる	完全実施
	<b>授業改善</b> ① 主体的・対話的で深い学び ② SDGs・ESDを意識した授業を増やす ③ 現代社会の課題や生活場面を取り上げる(教科・総合)	① SDGs・ESDを知る ② SDGs・ESDの視点で学習内容を見直す ③ できそうな単元や授業を考えてみる	① 実践してみる ② いろいろトライする	① 実践の質を高める、量を増やす	
	<b>特別の教科 道徳</b>	① 「考え議論する道徳」を理解する ② ①の指導案を作ってみる ③ 評価について知る	先行実施		

平成30年度には、新学習指導要領の基本理念である「社会に開かれた教育課程」の実現に向け、①「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた授業改善、②「特別の教科 道徳」試行(「考え議論する道徳」の実践、評価の研究)、③カリキュラム・マネジメント教科横断的な学習の推進(ESDカレンダー(教科領域単元計画表)の作成)を中心に取り組んだ。

令和元年度には、①授業改善を充実させ協同的な学びをテーマにした全教員1回の授業公開、②ESDカレンダーの実施・改善、③探求活動の推進(行事の事前事後学習の充実、卒業研究への取組、SDGsの理解)に取り組んだ。

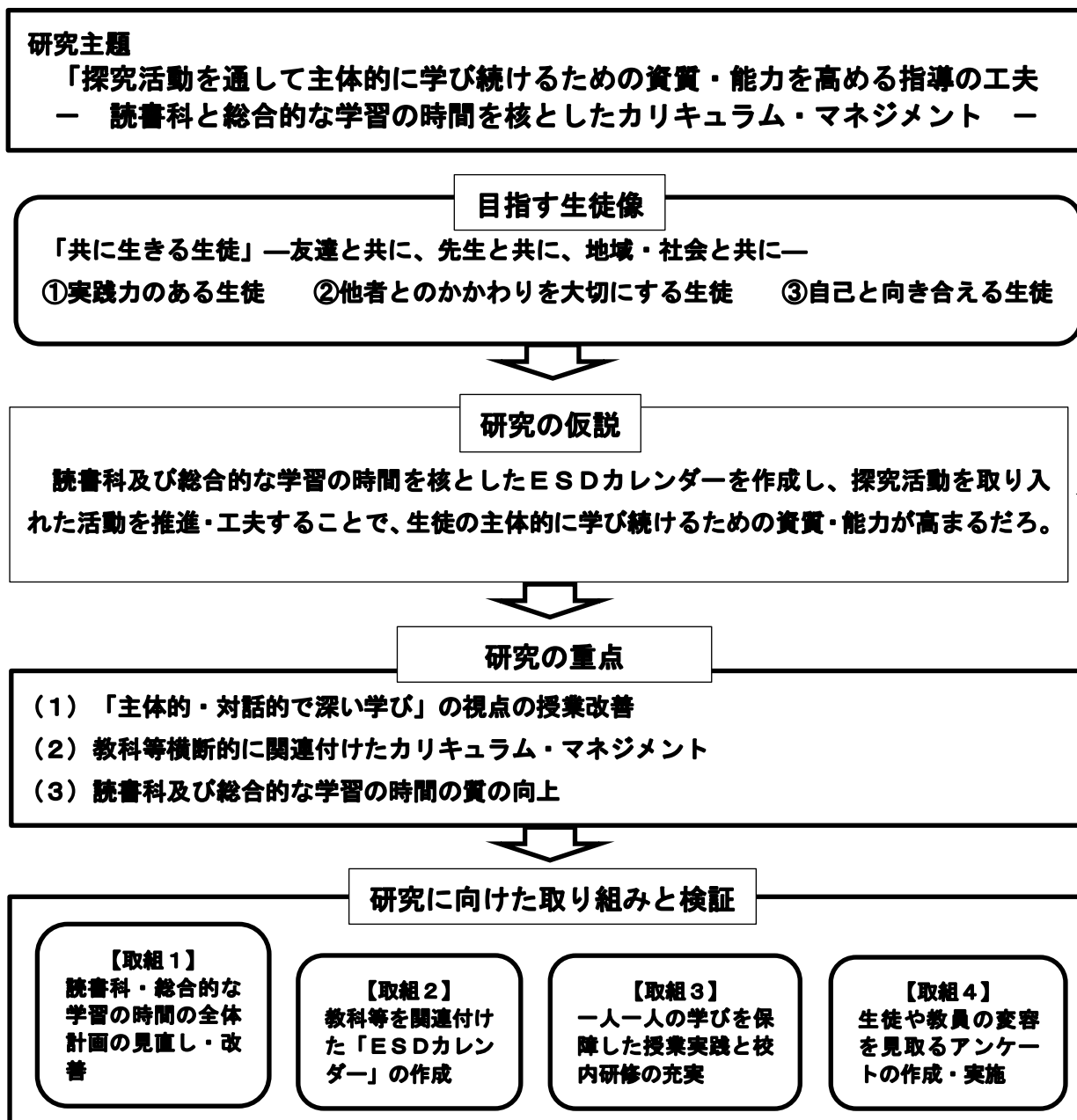
## 2 研究の構想

### (1) 研究の仮説

読書科及び総合的な学習の時間を核としたESDカレンダーを作成し、探究活動を取り入れた教育活動を工夫・推進することで、生徒の主体的に学び続けるための資質・能力が高まるだろう。

(2) 研究構想図

## 研究構想図



### (3) 読書科と総合的な学習の時間について

次頁の表2にあるように、読書科と総合的な学習の時間の目標達成のためには、探究的な学習を欠かすことはでない。そのため、本研究では2つの領域の関連性を高めながら、教科や他の領域とのつながりをつくることで相乗的な効果を期待できると考えた。

表2 「読書科」と「総合的な学習の時間」の目標

読書科の目標	総合的な学習の時間の目標
<p>読書における見方・考え方<sup>*</sup>を働かせ、読書を通じた<u>探究的な学習</u>を通して、生涯にわたって主体的に学び続けていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>＜※読書における見方・考え方＞ 読書を通じて、人や社会、自然に関わる様々な事象を多様な角度から捉え、自己の考えや生き方、実社会、実生活と関連付けること。</p> <p>(1) 読書から生きて働く知識を習得するとともに、資料の収集の仕方、記録の取り方を身に付けることができるようにする。</p> <p>(2) 問題を発見し、読書を通して集めた情報を整理・分析して解決するとともに、自らの考えをまとめ・表現することができるようにする。</p> <p>(3) 読書及び読書を通じた探究的な学習の良さを認識し、主体的に取り組むとともに、社会の中で積極的に学び続けていこうとする態度を養う。</p>	<p>探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。</p> <p>(2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。</p> <p>(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。</p>

(4) ESDカレンダー（教科領域単元計画表）について

カリキュラム・マネジメントの中核として、ESDカレンダーの作成を位置づけた。ESDカレンダーとは、各教科や各領域の年間の単元計画を一つの表にまとめたものである。各教科領域の計画を「見える化」することは、教科や領域の関連付けるために効果的である。そのため、カリキュラム・マネジメントがしやすくなると考える。「社会とのつながり」「教科間・教科領域間のつながり」をキーワードとして、ESDカレンダーを作成した。作成手順は、後述する。

(5) 探究的な学習について

本研究では、「探究的な学習」について、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動とした(図2)。

また、探究の過程（課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現）の学習過程を組み込んだ単元計画を多くの場面で取り組むようにした。

探究の各過程については、以下の通りである。

- ①【課題の設定】 体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ
- ②【情報の収集】 必要な情報を取り出したり収集したりする
- ③【整理・分析】 収集した情報を、整理したり分析したりして思考する
- ④【まとめ・表現】 気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する

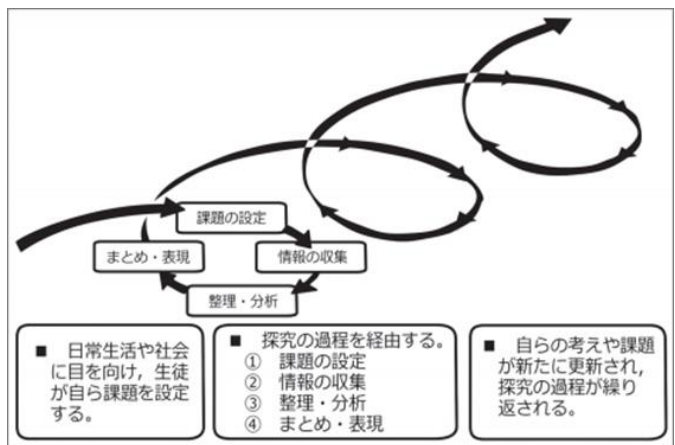


図2 探求の過程

(文部科学省「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」(平成25年)第2章)

### 3 研究の内容

#### (1) 「主体的・対話的で深い学び」の視点の授業改善

本校では、「20世紀型」から「21世紀型」へをキーワードとして、授業改善への取組を継続している。

##### ① 目指す授業像

- ア. 全ての生徒の学ぶ権利を保障し、全ての生徒の可能性を伸ばす授業
- イ. 学び合い（協同的な学び）のある授業（グループの活用、コの字型・テーブル型机配置）

##### ② 校内研修の充実

- ア. 全体会（年3回 学期1回の授業公開（学年代表者））
- イ. 全教員年1回の授業公開（ビデオによる学年授業検討会）

#### (2) 読書科及び総合的な学習の時間の指導計画の作成

まず、読書科と総合的な学習の時間の各学年の年間指導計画を作成した。他の領域との関連を考慮しながら、読書科と総合的な学習の時間との関連を持たせる計画にした（表3）。

表3 読書科と総合的な学習の時間の3年間の指導計画

学年	読書科		総合的な学習の時間		
		学習内容	時数	学習内容	時数
1	朝読書	・校外学習関連読書 ・『なるにはボックス』読書を含む	21	職業や自己の将来に関する課題(進路学習) →「キャリア・パスポート」(『生活と学習の手引き』)等  →「職業調べ」(『なるにはボックス』) ※次年度の「チャレンジ・ザ・ドリーム(5日間の職場体験)」につなげます。  ◇校外学習(東京巡り等)の事前&事後学習 ～東京・住みよいまちづくり～	15
	1単位時間で行う授業	ビブリオバトル POPづくり ◇校外学習の事前学習 「私が知りたい東京(仮)」自分が興味関心のある場所について本や資料を探し、読む。 → ミニレポート  学校図書室、中央図書館の利用	14		
2	朝読書	校外学習関連読書を含む	21	職業や自己の将来に関する課題(進路学習) →「キャリア・パスポート」(『生活と学習の手引き』)等  ◇校外学習(鎌倉等)の事前&事後学習 ～魅力ある観光のまちづくり～  ◇職場訪問の事前&事後学習 ～働くこと、20年後の自分～	35
	1単位時間で行う授業	ビブリオバトル ◇校外学習の事前学習 「私が知りたい鎌倉(仮)」自分が興味関心のある場所について本や資料を探し、読む。 → 鎌倉紹介 POP  学校図書室、中央図書館の利用	14		
3	朝読書	修学旅行関連読書を含む	21	職業や自己の将来に関する課題(進路学習) →「キャリア・パスポート」(『生活と学習の手引き』)等 →「面接練習を通して自己を見つめ、将来を考える」  ◇修学旅行(奈良・京都)の事前&事後学習 ～歴史と伝統文化、多文化共生～	35
	1単位時間で行う授業	◇修学旅行の事前学習 「私が知りたい奈良・京都(仮)」自分が興味関心のある場所について本や資料を探し、読む。 → 古都ミニ研究  ◇卒業研究 A 修学旅行の事前&事後学習の発展的研究 B 新たに自由にテーマを決めるの研究 学校図書室、中央図書館の利用	14		



### (3) ESDカレンダーについて

以下の手順で、平成30年度末にESDカレンダーを作成し、修正をしてきた。

#### ① ESDカレンダー作成の手順

##### 【手順1】本校の現状把握

SDGsの認識状況やESDで育成する能力等の習得状況を可視化する。①教職員、②保護者、③生徒会役員（中央委員会メンバー）の生徒等への質問紙調査や面接調査を実施し、現状を把握する。

##### 【手順2】目指す生徒像の共有

##### 【手順3】課題を見いだす視点と身に付けたい力の整理

調査結果を受けて、SDGsの重点目標の設定及びESDで育成する持続可能な社会づくりに必要な「力」より、本校で育成する生徒像のキーワードを設定する。

ESD…教科等の学習活動を進める中で、持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける。

##### 【課題を見いだすための視点】

- ・多様性（いろいろある）
- ・相互性（関わり合っている）
- ・有限性（限りがある）
- ・公平性（一人一人大切に）
- ・連携性（力を合わせて）
- ・責任性（役割や責任をもって）

##### 【身に付けたい力】

- ・批判的に考える力
- ・未来像を予測して計画を立てる力
- ・多面的・総合的に考える力
- ・コミュニケーションを行う力
- ・他者と協力する態度
- ・つながりを尊重する態度
- ・進んで参加する力

##### 【手順4】各教科主任を中心にESDの年間指導計画作成

【手順1】の各集計結果を受けて、本校で育成する生徒像のキーワードの下に、教科等間でのつながりを意識しながら生徒の主体的・対話的で深い学びを促す内容で作成する。

##### 【手順5】教科間等でのつながりについての検討

3学年分のESDカレンダーを全教員で検討し精度を高める。

##### 【手順6】「ミニ研修会」の実施

ESDカレンダーの完成に向けて、職員会議の中の15分程度使い「ミニ研修会」を4回実施した。研修においてESDやSDGs、カリキュラム・マネジメント等の基礎的事項の共通理解や、新学習指導要領の移行期間の意義等について周知を図った。

#### ② ESDカレンダーの修正及び実際

平成30年度に作成したESDカレンダーに基づき令和元年度には実践と改善を行った。令和元年度末の大きな改善点は、ESDカレンダーの教科等の欄の配置を変更したことである。探究活動が核となるように、探究として読書科と総合的な学習の時間をまとめて一番上部とした。今年度版のESDカレンダーは、図3～図5である。



図3 令和2年度 3年 ESDカレンダー

教科等	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
【探究】 総合 読書		卒業生の話を聞く会 8・E・④、⑨	修学旅行事前・事後学習 15・E・①、⑤			高校の先生の話聞く会 8・E・④、⑨						
特別活動		体育祭 練習・本番・振り返り 3・A・F・③、⑨				卒業研究制作 4・A・B・C・D・E・F・①・②・③・④・⑦・⑨						
道徳		ハグワシと少女 1・2・16・C・②・④	あふれる愛 1・2・C・D・④、⑥	もう一つの時間 11・A・F・②・⑦	変わりゆく地球 13・E・F・②、④、⑦	学芸発表会 練習・本番・振り返り 17・A・C・①、⑤、⑨				父のひと言 8・F・②・④・⑦	二通の手紙 16・D・F・②、④、⑦	
国語		「新しい博物学の時代」 9・A・④・⑦	「無言館の青春」 16・C・②、④	「文化としての科学技術」 9、11・A・⑦		「故郷」 8・D・②・⑨				「語り継ぐもの」 16・C・②・⑥		
社会		【歴 二度の世界大戦と日本】 1、8、16 F ③、⑥、⑦	【公 現代社会の私たちと生活】 8、9、12 F ①、⑦	【公 個人の尊重と日本国憲法】 5、10、16 D ④、⑨	【公 現代の民主政治と私たち】 16、17 ②、⑤、⑦					【公 私たちの暮らしと経済】 8、⑩、12 B、F ②、⑤、⑦		【公 地球社会と私たち】 1、7、13 A、C ①、⑨
英語		原爆について学ぶ 16・D・②、⑥								日本文化の紹介 17・B・④、⑥		
数学					2次関数 9・A・②、③、⑦					相似な図形 9・A・①、②、③、⑦、⑨		
理科		生命の連続性 15、A、②、⑥		運動とエネルギー 7、C、④、⑦								地球と私たちの未来のために 7、A、②、⑥
音楽				合唱コンクールに向けて 5・17・A・E・F・①・③・⑤・⑥・⑨								和楽器と日本の伝統音楽 5・17・A・E・③・⑤・⑨
美術		篆刻をつくろう 17・E・③、④、⑩				自画像 16・A、B・②、③、④、⑥、⑧						
保健体育		集団行動、短距離走(リレー) E、A・①、⑤、⑨										文化としてのスポーツの意義(体育理論) 16、17・B、D・②、⑥、⑦
技術家庭												子どもを守る条約や法律 3・D・③、⑥
												材情報に関する技術(プログラムによる計測・制御) 9・12・15・B・D・⑦、⑧、⑨
												これからの私と家族 5・D・②、⑦

○SDGsの目標... 1貧困 2飢餓 3保健 4教育 5ジェンダー 6水・衛生 7エネルギー 8成長・雇用 9イノベーション 10不平等 11都市 12生産・消費 13気候変動 14海洋資源 15陸上資源  
16平和 17実施手段

○持続可能な社会づくりに必要な視点... A多様性・B相互性・C有限性・D公平性・E連携性・F責任性  
○学習の過程で得られる力... ①計画する力 ②深く考える力 ③表現する力 ④理解する力  
○持続可能な社会づくりに必要な視点を支える力... ⑤協力する力 ⑥つながりを尊重する力 ⑦多面的総合的に考える力 ⑧思い描きつくる力 ⑨進んで参加する力





### Ⅲ 各学年の実践事例

#### 1 学年読書科「バトらないビブリオ」※注の取組

※注 「バトらないビブリオ」とは、通常のビブリオバトルとは異なり、チャンプ本（1位）を決めないものである。この形式にした理由は、1学年のため、取組を競争的なものにせず、相手の発表を聞き、その意見を尊重することや、自分も素直に意見を相手に伝えることができる場をつくることに重きをおいたためである。

#### 1 ねらい

- (1) 自分の好きな本の紹介を聴いてもらうことで、自分の考えに自信をもてるようにする。
- (2) 自分で本の紹介をしたり、他者の発表を聴いたりすることで、読書への関心を高める。
- (3) 自分の考えを他者に正しく伝える力や、他者の話をじっくり聴いて理解する力を高める。

#### 2 指導計画

時	指導計画・内容	場所	日時・期間
	「ワタシの一行」		休校期間
1	「お試し読書」 各登校グループごとに	図書室	分散登校期間
2	「オススメ読書」 ローテーションで各クラス1時間	図書室	11/9 13 16 25
3	「ビブリオバトル動画・概要説明」	体育館	11/27
4	「ポップ作り①」 ポップの書き方（読書科ノート）	各クラス教室	12/11
5	「ポップ作り②」	各クラス教室	12/18
	（ポップが仕上がらない場合は冬休みの課題とした）		冬休み
6	「バトらないビブリオ①」 発表用シート作り	各クラス教室	1/15
7	「バトらないビブリオ②」 発表会	各クラス教室	1/22
	（校内作品展にてポップ・ビブリオ展示予定）		3/4

#### 3 取組の内容

##### (1) 「ワタシの一行」

休校期間中に全学年で、今年度に入ってから読んだ本の文章中から、印象に残った一文を抜き出してB6程度のカードに書いて掲示して紹介する「ワタシの一行」という取組を行った。

その際、1学年では、学年だよりで読書のすすめに関する記事を掲載し、学年として推薦する本を紹介した。その本は、【推薦1】教科書に載っている本、【推薦2】全国学校図書館協議会の青少年読書感想文全国コンクール過去の課題図書および読書感想画中央コンクール過去の指定図書、【推薦3】国公立私立高校の入試に出題された本の3つに分類した。また推薦する書名が載っているリストのURLも学年だよりで示し、本の選定材料にさせた。

##### (2) 「お試し読書」(読書科ガイダンス)

読書科のガイダンスとして、探究学習の基盤となる基礎的な資質の育成を図った。ガイダンスの内容は「お試し読書」、図書室の利用法、百科事典の調べ方、十進法の分類等である。

まず、中学校にはどのような種類の本があるかを紹介する目的で、前述の【推薦1～3】から抽出した本を約50冊、図書室のテーブルにおき、その中から気になった本を3分間だけ冒頭から集中して読んでみるという「お試し読書」を行った。書名・著者名を記録し、さらに感想等を書きたい場合は、1時

間の振り返りとして書くことにした。

次に百科事典を使って、指定された用語を調べたり、本の所在を示す十進分類、奥付と引用の提示、目次や参考文献一覧など論文の体裁を学ばせたり、3年次の卒業研究を意識させた。

### (3) 「オススメ読書」

「バトらないビブリオ」に向けて、「オススメ読書」の時間を各クラス1時間設けた。これは前述の「お試し読書」の拡大版といえるもので、図書室にある【推薦1～3】の本の題名をカードにしたものをくじ引きで引いて15分間読んでみるというものである。自分の好みで選ぶのではなく、幅広いジャンルの本に触れることができる。「オススメ読書」では書名・著者名だけでなく、途中までの感想やどんな本なのか簡単に紹介するという活動も入れた。

### (4) 「バトらないビブリオ」

まず、実際に他校生徒がビブリオバトルで本を紹介する動画を体育館で1学年生徒全員で視聴し、「バトらないビブリオ」発表会に向けて、イメージと見通しをもたせた。その際、今回行う活動はチャンプ本を決定するわけではないことを説明するとともに、本を紹介するにあたって盛り込んでほしい要素などを書いた記入シート（下書き用）を配布した。

次に、「ポップ作り」では、各クラスで江戸川区の読書科ノートに沿って、ポップに必要な要素を考え、翌週にA5サイズケント紙に様々な色を用い、ポップを描いた。ポップを作ることは、読んだ本を深く理解していなければできない作業であり、自分の言葉とアイデアで本を紹介することが、「バトらないビブリオ」につながる活動になると考えたからである。

その翌週に「バトらないビブリオ」発表シートを作成し、発表会の準備を行った。

そして、「バトらないビブリオ」の発表は、まず4人グループで互いに発表しあい、その中でグループの代表者を1人決め、代表者はクラス全体に発表するという形をとった。その時に、超短焦点プロジェクタで本の紹介ポップを黒板に写した。今回はチャンプ本（1位）を決めなかったが、各自、発表を聴きながら、簡単な評価シートにメモをとることとした。活動後にはこれまでの振り返りや今後にかかわることを書かせた。

## 4 成果

### (1) 「ワタシの一行」

登校した1学年の生徒全員が提出することができ、学習活動において正確な引用、出典の明示の習慣を身に付けさせる一助となった。また、掲示したものを生徒が興味深く、熱心に見ている姿を多く見かけた。またお互いの選んだものについて話し合う場面もあった。

### (2) 「お試し読書」

手に取った生徒が多かった本は表4のようになった。表4の①と②の2冊は、入試に出題された本として紹介したものである。全体を見ると、読解がやや難しい本を読もうとする生徒も約1割いた。

また、フィクション(物語)ではなく、事実を追究しようとする論文が好きだという生徒も約3割いた。生徒は読解が困難と思われる本にも進んで挑戦しようとする意欲が表れてきたと考えられる。

表4 「お試し読書」で生徒が多く手に取った本

	順位	推薦分類	本のタイトル	人数
①	1位	【推薦3】	『ヒトはなぜ絵を描くのか』	7人
②	2位	【推薦3】	『雑草はなぜそこに生えているのか』	6人
③	2位	【推薦2】	『ブロード街の12日間』	6人
④	2位	【推薦1】	『ドッグ・シェルタ』	6人
⑤	2位	【推薦2】	『車夫』	6人

### (3) 「オススメ読書」

ライトノベルのようなものばかりではなく、普段生徒が手に取らないような読み応えのある本も読む機会を設けるために、「オススメ読書」に取り組んだ。しかしながら、挑戦してみたものの、実際は「なかなか文章が頭に入ってこない」という生徒が多かったが、中にはこの時に読んだ本を借りて読もうとした生徒や、昼休みの図書室開室時などに、「またカードを引きたい(入試の本に挑戦したい)」と言った生徒もいた。全体に1年生の図書室貸出冊数は増えた。『ある晴れた夏の朝』『南西の風 やや強く』【推薦2】や『遠くの声に耳を澄ませて』【推薦3】を紹介する本を選んだ生徒や、『二重らせん』『ロウソクの科学』『空気の発見』『転んでも、大丈夫』【推薦1】を選ぶ生徒もいた。総じて、多様な種類の本に出会うきっかけを作ることができたと考えられる。

### (4) 「バトらないビブリオ」

ガイダンス(動画視聴)では、ビブリオバトルの動画は等身大の生徒が活動している姿が中心だったため、生徒に自分にもできるのではないかと思わせることができたと考えられる。イメージしにくい、初めての取組を動画で見せることはたいへん有効であった。

「ポップ作り」は、読書科ノートに記入する方法が難しかった面もあったが、教員と生徒が共に考え、楽しく取り組んでいる様子が見られた。

「バトらないビブリオ」の発表に関しては、大人数の前での発表が上手くできない生徒でも、少人数グループでの発表ならば取り組むことができた。また代表となった生徒は、クラス全体に伝わる発表ができていた。生徒の振り返りの中には「(紹介の中で)読んでみたいと思う本が何冊もあった。」という声が多かった。

### (5) 朝読書について

全学年で朝読書時に読んだ本(書名・著者名)をB5程度の台紙に貼った「読書カード」に記録している。ここに記録する本は初めから終わりまですべて朝読書内で読んだ本というわけではなく、少しでも朝読書時に読み、後は自宅で読んだという本も記録するようにした。1学年では学年集会や学年だよりを使って、読書の日常化を呼び掛けている。難解な分厚い本を読むのもよいが(そこまでの本を読んでいる生徒はいないが)、1か月以上同じ本を読んでいたら、朝読書以外の時間も使って読了するようにし、朝読書では多くの本に触れることを重視している。そこから、日常的な読書に広げられたらと考えている。1学年で「読書カード」に記入された冊数の平均は次のように推移した。



表5 1年「読書カード」で記入した冊数

表5より、入学当初より、読んだ本の冊数は徐々に増加していることが分かる。

時期	記入冊数	備考
1学期末	3.17冊	(最多14冊)
2学期末考査前	5.81冊	(最多27冊)
2学期末	7.32冊	(最多36冊 最頻値4冊 中央値6冊)

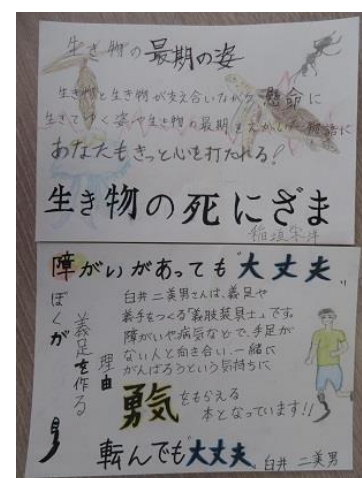
また、学校評価（生徒アンケート）では、「朝読書以外に1日あたりどのくらい読書をしますか。」の問いに、少しでもすると答えた生徒は52.9%で、30分以上読書する生徒は20.7%となっていた。これらのデータから、生徒の半数以上は日常的に読書することが身につけてきていると考えられる。朝読書以外では、読書をしない生徒も47.1%いるため、今後の課題としたい。

## 5 まとめ

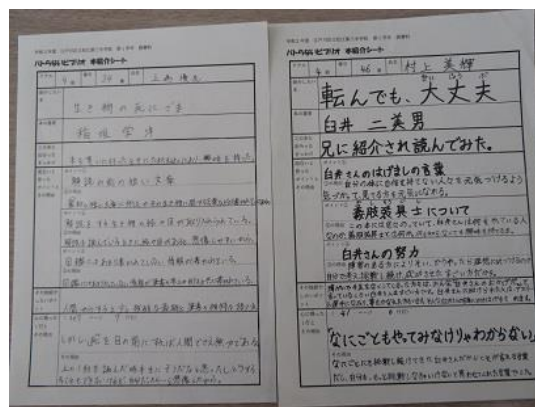
学校評価（生徒アンケート）では、1年生の読書科の取組は総じて高評価であった。「読書科の取組（ビブリオバトル・POPづくり・新聞深堀レポート発表、卒業研究等の各学年で行った取組）に積極的に取り組みましたか。」の問いに、高評価（あてはまる・ややあてはまる）が95.1%であった。また、「総合的な学習の時間や読書科では、自分で課題を立てて、情報を集め整理し、調べたことを考察したり、発表したりする学習に取り組めましたか。」の問いに、高評価（あてはまる・ややあてはまる）が75.2%であった。1年生としては、次年度につながる良い取組ができたと考えられる。

そして、本取組の3つのねらいについて見てみると、ねらいの（1）自分の考えに自信をもてるようにするには、小グループで発表し合ったことで、萎縮することなく表現できた生徒が多かった。ねらい（2）の読書への関心の高まりでは、他者の発表や今までの自分の好み以外の本に触れたことで、読書にはもっと広く深い世界があることが体感できた。ねらい（3）の伝える力と他者の話を理解する力の高まりでは、このような場を経験できたことは意義があるが、まだ高まるまでには達していないと言える。今後、このような場面を多く設定していきたい。

また、教科等横断的な視点で見た場合、1学年は、探究活動といえるものは読書科以外の総合的な学習の時間や各教科でも行った。その際、多くの生徒が正確な引用、出典の提示についてしっかり記述することができた。情報の収集・整理については、読書科の指導が活かされていたといえる。今後、生徒が探究活動を行う際、有用な資料と判断できるかどうかは、目次や体裁などから要領よく情報を得て、多数の資料にあたる能力が求められる。【推薦1～3】から研究論文の体裁をとったものだけを抽出した「オススメ読書」を今後行っていき、資料活用能力を高める方法もあると考えられる。探究活動の支援には、より一層の工夫をしていくことを今後の課題としたい。



POPづくり



パトらないビブリオ・本紹介シート



### Ⅲ 各学年の実践事例

## 2 学年読書科「新聞深堀レポート作り&プレゼンテーション」の取組

### 1 ねらい

将来主体的に社会に参画し、課題の解決に取り組むことに楽しさが感じられる生徒を育てるために、新聞記事を材料に、次の資質能力の育成をねらいとした。

- (1) 資料の収集の仕方、記録の取り方、情報のまとめ方を身に付ける。
- (2) 集めた情報を基に課題を見つけ、自分の意見を持ち、分かりやすく表現する。
- (3) 探究的な学習のよさを認識し、主体的に社会の中で学ぶ態度を養う。

### 2 指導計画

#### (1) 1学期 新聞スクラップ作り (全2時間)

回		内容
1	個人の学び	① ニュースへの関心状況を知るアンケートに答える。②新聞スクラップを作ることを知る。③新聞を読んで興味を持った記事を見つける。見つけたらハサミで切り、プリントに貼る。
2		①記事が気になった理由を書く。②見出しに関わる内容に線を引く。③調べてみたい内容を書く。④思ったことや考えたことを書く。

#### (2) 2学期 新聞深堀レポート作り&プレゼンテーション (全15時間)

回		内容
1	個人の学び	① 体育館にて内容の説明を受ける。②教室にて4人班で調べたい記事を探す。
2		調べる内容を班員全員で分担する。
3		PCの使い方、インターネットでの調べ方の説明を受ける。
4～5		PCで調べる。
6		画用紙に調べた内容をまとめる。
7		① 班で調べた内容を共有する。②課題を出し合う。③解決策を考える。
8～10	協同の学び	発表練習
11		クラス発表会 ※発表して終わりではなく、質問する時間も設ける。
12		クラス発表会 ※投票により代表を2班選ぶ。
13		代表班による学年発表会 ※体育館で各クラス代表によるポスターセッションを行う。
14		代表班による学年発表会 ※全班発表後に投票を行い、優秀班を決める。
15		制作物の貼られた模造紙を廊下に掲示する。

### 3 取組の内容

#### (1) 1学期 新聞スクラップ作り

2学期の本格的な班による調べ学習の導入としての内容である。授業の冒頭では生徒のニュースへの関心状況を知るためのアンケートを行った。そして新聞を使ったゲーム(一番小さい文字を探してみ

よう、一番カッコいい人を探してみよう、新聞の値段はどこに書いてあるか探してみよう等)も行い新聞に慣れさせた。生徒に関心をもったニュースを選ばせ、「関心をもった理由」「調べてみたい内容」「記事への自分の意見」をまとめさせた。

## (2) 2学期 新聞記事を班で深める解決策のプレゼンテーション

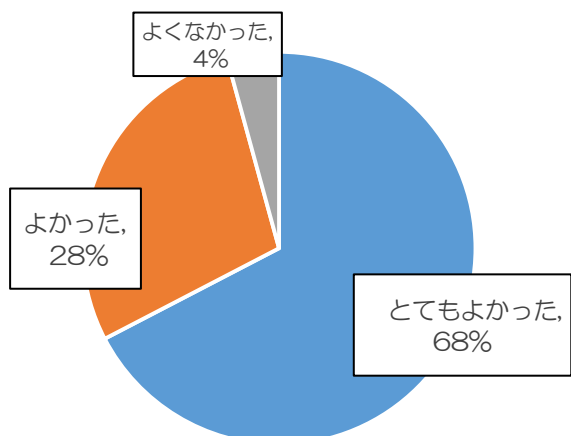
3の(1)の発展として新聞記事で気になったことを調べる活動を4人班で行った。生徒たちには詳しくニュースを知る中で、課題を発見させ、課題解決の提案をさせた。発表の後は質問を受け付け、生徒全体の理解を深めさせた。発表する班には質問に答えられるレベルまでの内容理解を目標にプレゼンテーションさせた。

## 4 成果

生徒の取り組み状況を把握するために、単元の最後に生徒アンケート(回答数 143人)を実施した。結果は、以下ようになった(図6)。なお、生徒の感想(自由記述)については、各質問項目に合うと考えられる代表的な感想を抽出した。

アンケート結果から、90%以上の生徒が、単元のねらい(1)(2)(3)について達成できていると感じていることが分かった。

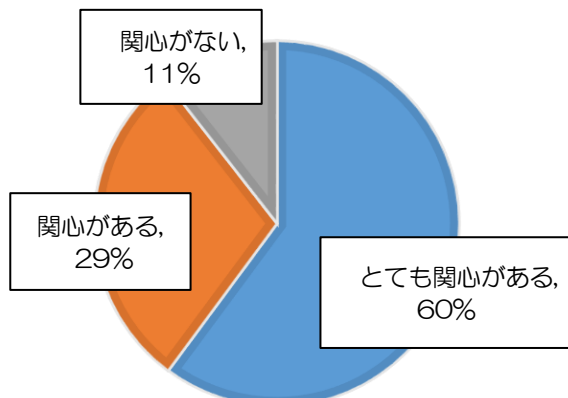
### 【質問1】自分たちで選んだテーマをPCで調べ、課題を解決する活動をしてどうだったか。



#### <生徒の感想>

- ・想像していたよりも楽しかった。調べたことに対する解決策が見つかったときの達成感を味わえた。
- ・自分一人の学習の時は全て一人で行わなければいけなかったけれど、班で分担することができた。班員それぞれの意見も取り入れられるようになったことから班での活動の方が、良い作品が作れた。

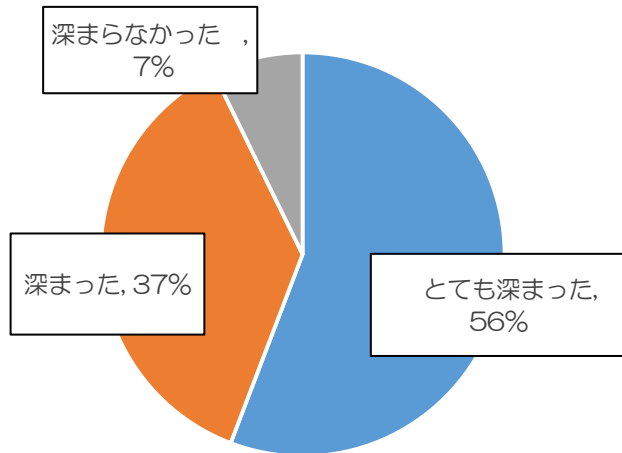
### 【質問2】新聞調べ活動を通してニュースに関心が持てるようになったか。



#### <生徒の感想>

- ・自分たちが疑問に思ったことを、PCで深く調べてみて、とても達成感があった。自分のもやもやがはじけ、心がさわやかになることが感じられた。深堀はとてもいいなということに気づいた。
- ・一つのニュースを深堀することで、たくさんの意見や資料がでてきてニュースを見るようになった。

【質問3】社会問題に対する解決策を考える活動で社会に対する理解が深まったか。



＜生徒の感想＞

- ・実行できるかどうかは気にせずに、中学生の自分たちなりの、解決策を考えられて、その問題が近くなった。
- ・最初は、調べても前と後で何も変化がないと思っていたが、調べていくと、同じ題でも様々な内容があり、勉強になった。
- ・あまり興味がなく、知ろうとしなかったが、今となってとても興味が湧いた。様々なことを調べ学び、社会に貢献したいと感じた。

図6 生徒の取組状況の分析（生徒アンケート）2学年生徒回答数 143

5. まとめ

将来主体的に社会に参画し、課題の解決に取り組むことに楽しさが感じられる生徒を育てることをねらいとしてこの取組を実施した。

本以外の資料である新聞を使った取組で、1学期は新聞に興味を持たせることから始まった。予想以上に生徒は新聞に対する興味を持ち、自分の選んだ社会問題の解決策を考えていた。2学期は班員とコミュニケーションを取りながら深掘する記事を決め、内容を手分けして調べた。そして調べた内容を持ち寄り、解決策を考えた。どの生徒もパソコンを使いながら、自分のテーマをしっかりと調べていた。発表の工夫に関してはクラス間で差があり、教員が工夫するよう指導したクラスでは、劇を取り入れる班もあった。一方で、教員による指導の少なかったクラスでは淡々と原稿を読む班が多かった。初めに教員間で指導内容や方法の確認がなされなかったことに起因する。今後の課題である。

しかし、全体発表会場で各クラス代表の発表の工夫を見ることができ、どの生徒も刺激を受けたと考える。1学年時の職業新聞発表会やビブリオバトルなどの機会に、発表する力を育ててきた。今後どのような工夫のある発表をするのか楽しみである。

この探究活動を通して、社会のニュースに興味をもつだけでなく、解決策を自分なりに模索したとアンケートで答える生徒は、90%以上となった。ここから、おおむね目標は達成できたのではないかと考える。また、本校の取組である4人班による学び合いもより活発になり、協同で問題を解決しようとする態度が養われた。「個人の学び」から「協同の学び」へ繋げることで、クラスメイトの多面的・多角的な視点に触れ、自分の考えを広げることができるようになった。「自分の意見を出す」「相手の意見を聞く」「相手の表情を見てコミュニケーションを取る」「相手の意見と自分の意見の調和を探り解決策を考える」この取組を生かして、3学年では更なる学びに発展させていきたい。



新聞深掘レポート

・ポスターセッション用

### Ⅲ 各学年の実践事例

## 3 学年読書科「卒業研究」の取組

### 1 ねらい

3年生では、これまでの読書科の学習を振り返るとともに、各教科等との横断的なつながりを意識した総合的な学習の時間の様々な取組全体の総まとめとしての「卒業研究」を目指して取り組む。以下3つがねらいである。

- (1) 自分が興味関心をもち、また疑問に思っていたことなどを自ら主体的に資料を選択し、得た情報をさらに取捨選択していく力を養う。
- (2) 探究的な学習の楽しさや醍醐味、達成感を体得する。
- (3) 「目的をもった読書」及び「読書を通じた探究的な学習」の良さを認識し、卒業後の生活の中でも積極的に学び続けていこうとする態度を醸成する。

### 2 指導計画

日時	指導計画・内容
10/9	①「卒業研究ガイダンス」 ②仮テーマの検討
10/12	①テーマとサブテーマの決定 ②卒業研究企画書の作成始め
10/19	① 卒業研究企画書の完成(研究の動機・仮説・研究を通して期待できること)
10/23 ～	研究への取組
11/27	卒業研究の大まかな完成
12/11	表紙・奥付の作成完了→卒業研究冊子の完成
	※進度によっては朝読書時間を活用して2学期中に完成させる。

### 3 取組の内容

3学年の「卒業研究」は以下の手順で、生徒が主体的に取り組んだ。教員は必要に応じて、指導、助言、相談等の支援を行った。

- ① PowerPointを用いてのガイダンスでは昨年度の取組を具体的に示しながら行った。
- ② 自分の興味関心や疑問に思っていることを考え、テーマをじっくりと決めさせた。
- ③ 資料集めに期間を設け、資料を収集する一方、増えていく資料は教室保管させた。
- ④ 企画書では「研究の動機・仮説・期待できること」を考えさせた。
- ⑤ 章立ての基本形式や引用・参考文献の表し方を確認し、研究をスタートさせた。
- ⑥ 研究が完成した生徒の作品を学級内で見合う時間を適宜設定した。
- ⑦ 3学期に新たに総合的な学習の時間を用いて、「立体POP」制作に取り組ませた。

## 4 成果

### (1) 卒業研究への取組状況の分析

「卒業研究」の取組後、生徒に事後アンケートを行った(回答数137)。表6のように、「卒業研究」に楽しさを感じながら取り組んだ生徒は90%となった。また、「卒業研究」に楽しさを感じた理由(複数回答可)として「ア」と「イ」が最も多く挙げられていた(表7)。

表6 「卒業研究」の取り組みはどうか

1	とても楽しかった	26%	90%
2	楽しかった	32%	
3	どちらかという楽しかった	32%	
4	あまり楽しくなかった	6%	10%
5	楽しくなかった	4%	

生徒たちは、自分の興味・関心がある内容について自ら積極的に調べ、考察していくことによって内容をより深く理解することができた。そしてこれらの経験を通して、探究活動の楽しさに気付いた姿も同時に読み取ることができた。楽しくなかった理由は表8のようになった。「難しい」「大変だ」の理由が多いが、「難しいから楽しい」「大変なことだからこそ、完成後の達成感がある」等の意味付けを教員がすることが大切だろう。

表7 1「とても楽しかった」2「楽しかった」3「どちらかという楽しかった」を選んだ理由  
楽しく学習に取り組んだ生徒123人の内訳(複数回答可)

ア	自分が決めたテーマを調べる活動が楽しかったから。	98人
イ	自分で調べることでより詳しくわかったから。	95人
ウ	テーマに迫る、色々な調べ方を探ることができたから。	31人
エ	調べるという目的の読書は新鮮だったから。	20人
オ	自分の調べたことを冊子にすることで再確認できたから。	23人
カ	他の人の考えを知ること自分の考えが広がったから。	27人
キ	その他(自由記述) 自分が発言したいことを書いて示すことができたから。 自分の将来の夢に関するテーマだったから。 興味あることをより深く知ることができたから。	3人

表8 4「あまり楽しくなかった」5「楽しくなかった」を選んだ理由  
楽しく学習に取り組めなかった生徒14人の内訳(複数回答可)

ア	テーマを決めることが難しかったから。	6人
イ	自分で調べてもあまりよく分からなかったから。	3人
ウ	テーマに迫る調べ方がよくわからなかったから。	1人
エ	調べるという目的の読書はつまらなかったから。	4人
オ	自分の調べたことを冊子にすることが大変だったから。	7人
カ	他の人の考えを聞いても自分の考えは変わらないから。	3人
キ	その他	4人

## (2) 卒業研究への取組を始める前と後の生徒の変化

卒業研究を始める前の気持ちと卒業研究を完成した今の気持ちの記述から、生徒の気持ちの変化を下の表にまとめ、分析を行った。

表9 卒業研究への取組を始める前と後の生徒の変化

	卒業研究を始める前の気持ち	卒業研究を完成した今の気持ち	見とれる変化
生徒A	受験勉強中に始まったので、 <u>卒業研究をやる心の余裕がなく、とても落ち着かなかった。</u>	自分が以前から気になっていたことを自分で調べて解決できたのでスッキリすると共に <u>達成感</u> を感じた。また、自分だけで作品を制作し完成したことはあまりなかったなので、とても良い経験になったと思う	心の余裕なし ↓ 達成感・成就感
生徒B	先輩の卒業研究を見て、私もこんなにしっかりとまとめられるのか、 <u>不安</u> だった。	私は今流行しているコロナウィルスについて調べ、自分が気になっていることについて深く知ることができた。また、構成や内容を初めから考え、最後までやることで、とても <u>達成感</u> を感じた。	不安 ↓ 達成感・成就感
生徒C	何を調べればいいのかよく分からず、ちゃんと完成させることができるか <u>不安</u> だった。	自分の好きなことを調べて、知識として身に付けることができた。一から自分で調べるのはとても大変で、まとめる作業で苦労をしたけれど、 <u>達成感</u> があった。	不安 ↓ 達成感・成就感
生徒D	どんなテーマにしようかと考えた。深く調べたい物が自分にあるのだろうかと思った。	一つのことの一貫した調べ学習をすることの大切さが分かった。楽しんで学習ができて良かったと思う。 <u>自分が深く調べたいものに出会えて良かった。</u>	迷い ↓ 学ぶ喜び
生徒E	少しおもしろそうではあるけれど、 <u>あまりやりたくない</u> と思っていた。	内容が薄っぺらになってしまった。他の友達はたくさんの本を図書館で借りてきていたが、自分は資料を少ししか準備しなかった。あの時、 <u>もっと積極的に調べておくべきだった</u> と悔いを残している。できたらもう一度やり直したい。	低意欲 ↓ 粘り強く学ぶ心
生徒F	自分が調べたいことを調べてまとめられるので、 <u>楽しそう</u> だというポジティブな気持ち。	「中学三年生らしいものをつくる」ということを意識しすぎたからか、思ったよりも時間がかかったが、その分、 <u>完成したときは本当にうれしかった。</u>	学ぶ楽しみ ↓ 達成感・成就感
生徒G	今まで疑問を持っていたけれど、 <u>調べる機会がなかったものを調べるきっかけとなり、</u> 楽しみだった。	作っていくうちに、次から次へと疑問が出てきて、とても楽しかった。そして、それを調べることで内容の濃いものが作れたと思う。 <u>テーマも自分で決めて、</u> 作っていくことを、またやってみたいと思っている。	学ぶ楽しみ ↓ 学び続ける意欲

生徒の気持ちの変化を「学びに向かう心」として、段階別に分析した。第一段階は「低意欲」「不安」「迷い」「心の余裕がない」等、マイナスの心の段階である。課題を決め、調べまとめるというプロセスを経て、成果物が完成すると、第二段階として「達成感」「成就感」が表れ、「学ぶ楽しみ」「学ぶ喜び」も感じられるプラスの心の段階に転じるようになる。そして、さらにその次の段階で「学び続ける意欲」や「粘り強く学ぶ心」が表れてくると考えられる。



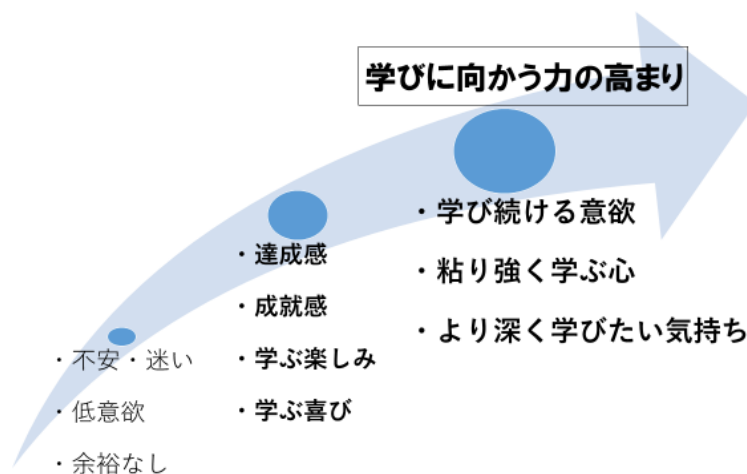


図7 「学びに向かう心」の変化

## 5 まとめ ～探究活動としての卒業研究の取組を通して～

コロナ禍の中、実質的には10月のガイダンスからスタートした本年度の卒業研究であったが、1年次から積んできた「読書科の学習の総まとめ」として、生徒はとらえることができた。

本校では、1年次から読書科・総合的な学習の時間、そして各教科等の授業で継続して「図書館やインターネットでの調べ学習の方法」「必要な本の探し方」「インターネットでの検索の注意点(「ネチケツト」)」の学習に取り組んできた。そしてたくさんの「本の帯」を収集し、それらを互いに持ち寄り、それらから分析して見出した「POPづくり」への手がかりなどを、卒業研究を行うにあたり、まず振り返った。

卒業研究の資料は各自、日を追うごとに増えていった。調べを進めて行けば行くほど、さらに疑問点が出てくる。それを調べるためにさらに資料を探す生徒が増えていったからである。「ネットサーフィンをしているときみたいに楽しい。」「分かったことを家族に教えたら皆、驚いていた。」などの声も聞くことができた。

さらに卒業研究の完成後、これまでの読書科の学習を振り返りながら、卒業研究のまとめの手段の一つとして、POP文字のレタリングや「立体的なデザイン」を工夫する「立体POPづくり」にも挑戦した。

1年次のPOPは平面作品であったので、さらにステージUPを目指したのである。完成した生徒の作品を順次教室の背面黒板に掲示したり、生徒が登校する朝、正面黒板にマグネットで掲示したりしていくことも試みた。これら、他の生徒の優れた作品に日常的にふれることで、自身の作品もさらに完成度を上げようとする生徒も多く見られた。

卒業研究は個々の生徒にとって初めての取組であった。しかし、3年間の総合的な学習の時間の様々な学習、そして日々の教科等における課題解決的な探究活動を通して、生徒は確実に、そして継続的に自己と向き合ってきた。その成果が卒業研究に集約されたことを感じたと言えるだろう。



立体POPづくり



卒業研究



#### IV 研究の成果と課題

本研究の成果を、1 読書科に関する学校評価（生徒アンケート）の結果、2 校内研修委員による実践の振り返り、3 総合考察の順序でまとめる。

### 1 読書科に関する学校評価（生徒アンケート）の結果

#### （1）読書科への取組状況

「読書科の取組（ビブリオバトル・POPづくり・新聞深堀レポート発表、卒業研究等の各学年で行った取組）に積極的に取り組みましたか。」の問いに、高評価（あてはまる・ややあてはまる）が全校平均で90.4%であった。また、「あてはまる」と答えた生徒の割合は全校平均で57.5%であり、「ややあてはまる」の割合を全ての学年で上回る数字となっている。

表 10 読書科への取組状況

質問項目		あてはまる	ややあてはまる	合計
読書科の取組（ビブリオバトル・POPづくり・新聞深堀レポート発表、卒業研究等の各学年で行った取組）に積極的に取り組みましたか。	1年	63.4	31.7	<b>95.1</b>
	2年	51.5	34.6	<b>86.1</b>
	3年	57.7	32.3	<b>90.0</b>
	全体	57.5	32.9	<b>90.4</b>

#### （2）探究活動への取組状況

「総合的な学習の時間や読書科では、自分で課題を立てて、情報を集め整理し、調べたことを考察したり、発表したりする学習に取り組めましたか。」の問いに、高評価（あてはまる・ややあてはまる）が全校平均で81.6%であった。また「あてはまる」と答えた生徒の割合は1年生25.6%、2年生39.1%、3年生43.3%となっており、学年が上がるにつれ、増加している。

表 11 探究活動への取組状況

質問項目		あてはまる	ややあてはまる	合計
総合的な学習の時間や読書科では、自分で課題を立てて、情報を集め整理し、調べたことを考察したり、発表したりする学習に取り組めましたか。	1年	25.6	49.6	<b>75.2</b>
	2年	39.1	48.6	<b>87.7</b>
	3年	43.3	38.6	<b>81.9</b>
	全体	36.3	45.6	<b>81.9</b>

（1）（2）の結果から、学年を経るに従い、生徒の取り組む意欲や、取り組んだ後の充実感も高まっていることが分かる。学校全体として好循環で読書科の取組が継続できていると考えられる。

### 2 校内研修委員による実践の振り返り

令和3年2月、校内研修委員（各学年2名）と校長・副校長で本研究の振り返りを行った。学年別に整理すると以下ようになった。

#### （1）1学年

①1学年では通常のビブリオバトルではなく、チャンプ本を決めない「バトらないビブリオ」の取組を行った。「ビブリオバトル」は区読書科ノートでは2学年で扱われているため、計画当初は“できない生徒もいるのではないか”という不安もあった。しかしながら、小学校の読書科において生徒は「読

書発表会(小2)」「ブックトーク(小4)」「読書会(小6)」を学んで入学をしてきていたため、比較的抵抗感無く自然に取り組むことができた。順位を意識しないことで、発表を聞いている側の生徒もじっくりと耳を傾けることができた。

②入学後もコロナ禍で分散登校を余儀なくされた1学年生徒にとって、この「バトらないビブリオ」の取組は、生徒の人間関係づくりにも良い影響があった。あえて競争的なものにしないことで、のびのびと発表ができ、和気あいあいと言葉を交わせた。その雰囲気は、受容的に互いを知り合うチャンスとすることができたと言えるであろう。これは今後の「学び合い」の質を高めることにもつながっていくと考えている。

## (2) 2学年

①新聞を題材にした「新聞深堀レポートづくり&プレゼンテーション」の取組では、前述の2学年報告にあるように、社会への関心がたいへん高まった。本校では、全学年の廊下に定期購読している新聞を3誌ずつ置いているスペースがある。この読書科の取組をきっかけとして、1年次よりも多くの生徒が新聞を手に取り、友人との会話が弾んでいる姿を見ることができた。

②9月のオリエンテーションの段階で、夏季休業中に学年教員が制作した「新聞深堀レポート」を生徒に披露した。このことにより、生徒は一つのゴールの形を予めイメージすることができた。また、教員が楽しみながら調べ、楽しみながら制作している作品を実際に目にすることで、生徒は“自分も調べてみたい”“自分も表現してみたい”という思いをもつことができたと考えられる。

③4人班で調べる共通テーマについて各自の視点で記事を探し学びを深める活動は、ゆるやかなジグソー学習のイメージがあった。本来のジグソー学習法とは違い、自分の担当箇所の出来不出来が班の学習に強く影響することが少ないため、学習の苦手な生徒も自分の視点で記事探しを楽しむことができた。そして、各自の記事を持ち寄ることで、テーマを多面的多角的に深めることができた。

## (3) 3学年

①3学年では、読書科に積極的に取り組んだ生徒の割合が90%という高い数字にも表れているように、本校で昨年度より始めた「卒業研究」に、たいへん意欲的に取り組んでいたと言える。

②1・2年次から、各教科や総合的な学習において様々な探究学習を行ってきた。これらの継続的な取組が、読書科の探究学習である3年時の「卒業研究」につながったと考えている。本研究全体のまとめとして、卒業研究をゴールとした探究活動について、この後の総合考察でさらに述べる。

## (4) 学年共通

3つの学年に共通して言えることは、全教科で実践している4人グループの「学び合い」のスタイルが、読書科の取組にも好影響を与えているということである。例えば、2年生では、テーマ選択時の話し合いやPCを使った調べ学習で、自然と話し合い協力し合う場面があった。学校評価の生徒アンケート「学び合い・小グループ活動を通して、自ら授業に参加する意欲や、さらに学ぼうという意欲が高まりましたか。」の問いに、全校平均で今年度87.1% 昨年度89%の高評価(あてはまる・ややあてはまる)の数字になっている。本校では、授業時に「学び合い」の場面をできるかぎり設定することや、コの字型机配置等を継続して進めており、そのことも対話的な活動が活発になり、探究活動の質の向上につながっていると考えている。

### 3 総合考察

#### (1) 研究主題に対するまとめ

本校では、総合的な学習の時間と江戸川区独自の読書科を、教科等横断的なカリキュラムの核として学校全体で取り組んできた。生徒の学びは、各学年のE S Dカレンダーによって教科等が互いに関連を強め、核となる総合的な学習の時間と読書科における探究活動の学びへと収斂され昇華されていった。またその際、教師がE S Dカレンダーを作成することを通して、教師自身が改めて教科等の横断的な学習の意義を共通理解することができたことも付け加えておく。

ここまで見てきたように、本研究では、探究活動が生徒の主体的に学ぶ態度の醸成に大いに役立つことが明らかになった。最後に、「卒業研究」を学びの集大成として捉えたときの、生徒の中学校3年間の学びの過程とその意味について考察する。

2年生生徒の「新聞深掘り」の探究学習の感想には、「最初は調べても前と後で何も変化はないと思っていた」「学習する前は、(探究学習に)あまり興味がなかった」という生徒も少なからずいた。また、「卒業研究」では、当初、これまで生徒が多く取り組んできていた「レポート」や「調べ学習」と、この「卒業研究」との違い(仮説の設定など)に、大多数の生徒は戸惑っていた。

しかし、理科の実験での仮説を立てての実験・考察、国語のグラフや図を示して伝える学習等、各教科の探究的な学習の積み重ねが、読書科と総合的な学習の時間の探究活動と繋がっていることを生徒は実感することができた。そして読書科の探究活動において、生徒は様々な情報を取捨選択して整理していく中で、自分自身の疑問点を一層明確に把握でき、より深く理解できることを再確認できたであろう。

読書科の小・中学校9年間の継続した学びの体験から、生徒は興味・関心とともに、探究に向かう見通しと手段を学ぶことができる。これらは将来の自身の夢の実現に向けて大きな力となっていく。3年生が実施した卒業研究取組後のアンケートにおいて「卒業研究は今後の自分にとってどのような意味があったと思うか」という問いに対するへの自由回答では、「高校生になって役立つと思う」「自分の興味あることを深く調べることができてとても楽しかった」という回答の他に、「大人になってからも分からないことは本を読んで調べていきたいと思う」などの回答もあった。まさに生涯読書人の形成に資する学びとすることができたと考える。

そしてこのことが、生徒がこれからの社会の創り手となるために必要な資質・能力の3つの柱(①生きて働く知識及び技能の習得、②未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力等の育成、③学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性等の涵養)を育てることにもつながっていることは言うまでもないだろう。

結びに言えることは、資質・能力の3つの柱の中でも、自分らしい人生を送るための根源といえる「学びに向かう力・人間性等」に強く働きかけるには、探究活動が欠かせないということである。このことが、本研究の最大の成果と考える。

#### (2) 今後の課題

①突然のコロナ禍によって、3学年修学旅行、環境の視点から自然との調和をテーマとした2学年の林間学校、チャレンジ・ザ・ドリーム等を実施することができなかった。このため、研究の大切な一翼であった総合的な学習の時間や特別活動との連携についての研究が不十分であった。

②3年の取組「卒業研究」のより一層の工夫である。読書科の取組では「卒業研究」を中学校3年間の学びの集大成と考えている。そのため1・2年次より、「卒業研究」への見通しを持たせながら、各取組を実施していく。

③「マッピング」「マンダラート」などのシンキングツールの活用が「卒業研究」取組の導入時に限られ、不十分であった。そのため、これらのツールの活用場面を広げていく。

④研究のレベルを高めるために、「卒業研究」の構想発表会を設け、個人テーマや内容の構想発表、進行状況の中間報告も確実に行っていく。

⑤生徒自らが長期休業期間などを活用してフィールドワークを行ったり、また自分から積極的にアンケートの実施を企画したりなど、体験的な学習活動の機会ももたせる。

⑥本研究では、小学校での読書科の取組の状況、生徒の到達度等の把握が不十分だった。中学校3年間の読書科の見通しを一層明確にもてるようにするために、小学校との連携をより一層深めていく。

⑦GIGAスクール構想により、一人一台タブレットが導入される。生徒自身が、深く調べるためにタブレットを用いることはもちろん、タブレットを用いて、生徒自身が作成したアンケート調査をとり、データをまとめることも可能になる。今後、有効なアプリケーションソフトの活用も提示していく。

以上を、今後の課題としていきたい。

## 終わりに

今回、本校で行った研究は、江戸川区の重点事業の一つであり、今後、新学習指導要領に記された「主体的・対話的で深い学び」につながる重要な教育課題です。本校では読書科と総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントにより、いかに主体的に学び続けるための資質・能力を高められるかを、各学年の実践をもとに研究を進めました。今回、1年間の集大成として、このように研究紀要を完成させることができました。生徒が探究活動の重要性を知り、成長していく姿をうれしく思うとともに、教員も読書科の取組を工夫して実践する中で、一段と成長していったと考えています。この研究を基にして、「主体的に学び続ける」生徒を育成するための教育活動を今後も継続していく所存です。最後になりますが、この研究に携わっていただいたたくさんの関係者の皆様方に感謝を申し上げ、終わりの言葉とさせていただきます。